

『食の資料探しハンドブック』

荒木一視*・鎌谷かおる**・木村裕樹***著、昭和堂、2022年

山 本 健 太†

著者が「はじめに」で、近い将来にゼミで取り組む研究のために必要な能力だと指摘するように、本書で紹介される資料へのアクセスやその活用方法などの内容は、主にゼミ配属以前の学部1、2年生に必須（であるはず）のものである。その意味で、本書は例えば1年生向けの基礎ゼミなどの副教材として手元に置いておきたい一冊である。

ただし、本書のタイトルが「ハンドブック」とされていることからわかるように、あくまでも、（学生が）比較的簡単にアクセスできる資料としてどのようなものがあるか、それらの資料は実際どのように研究に使えるかといった、研究者であれば経験的に理解していることを、簡単な解説とともに羅列しているに過ぎない。そのため、本書だけでは春学期分のコンテンツを満たすには不十分である。

とはいえ、ややもすれば白書や報告書、はてはネット記事の記載内容を鵜呑みにし、裏どりもせずに、長文の直接引用で埋め尽くされたレポートとも呼べない駄文や、根拠となるような資料がなく、自身の妄想と希望的推測と視野の狭い一方的な思い込みを書きなぐった怪文を出し逃げする学生が少なくない昨今の状況を鑑みるに、こういった基礎的な解説書の存在はとても重要である。

そして、管見の限りであるが、本書のような、特定のテーマにそって羅列的に、また平易に紹介したガイドブックは、これまでにない。加えて、本書は食をテーマに、それに関する資料へのアプローチ法を集めたものであるが、そこで示される資料探しのノウハウや資料の見方、考え方は、他の分野にも応用できるものであり、敷衍可能性の高さも認められる。その意味においても、本書が提示する知識やノウハウは、いまだ興味^{ふえん}の方向性が定まらない初修者にとって、かれらの遠くない未来に直面するゼミ選択とその後の卒業研究の際に果たす役割は小さくないだろう。

本書の構成は以下の通りである。「食を学ぶための資料とは」と題される第1章は、文字資料編、非文字資料編、歴史資料編の3節から成る。ここでは、第2章以降、ほぼ同じ形式で紹介される、さまざまな食に関する資料の位置づけを表や図を用いて整理している。とりわけ文字資料の整理で用いられている3次元のマトリックスは、本書の構成を理解する上でもっとも重要で、本書の根幹を

* 立命館大学食マネジメント学部教授

** 立命館大学食マネジメント学部教授

*** 立命館大学食マネジメント学部准教授

† 國學院大學経済学部教授

kenta@kokugakuin.ac.jp

なすものである。すなわち、左右の軸を食料の生産から加工・流通、消費といったフードチェーンが成している。上下の軸は定量的な資料か、定性的な資料かといった資料の性質である。そして前後の軸は、資料の作成主体が公的性質のものか民間企業などの私的な性質のものかといったことを示している。本書で紹介する資料をこのようなマトリックスで整理して示すことで、読者の頭の整理も助けられることだろう。

以上のような視座の下で、2章では文字資料、3章では非文字資料、4章では歴史資料の入手方法が紹介される。4章までに紹介される資料は、いずれもインターネット上で比較的簡単に入手可能な日本国内の資料を意図的に選別してある。それに対して5章で紹介されている資料は、外国の統計資料や紙媒体による資料、街中の碑などであり、入手した資料の活用方法について、具体的に紹介する発展的な内容となっている。

第2章以降は、各資料で節に分けられ、いずれもおなじ構成をしている。最初に「資料の写真や図解」として、多くの写真やスクリーンショットを用いて、実際にどのような資料であるのか丁寧に紹介している。続いて、資料の背景情報などが「どんな資料なの？」として紹介されている。続く「どのように活用するの？」では、調査・研究でどのように利用できるのか、ヒントが提示される。「どうしたら入手できるの？」は資料の作成機関へのアクセス方法や資料の読み方が示される。また、これらの資料を使った代表的な研究を「この資料を使った研究成果の例」として紹介しているものもある。これらの構成は、頭から全部読んで書評を書かなければならないような者にとっては冗長に感じられるが、必要なところだけぱっと探して、資料を見つけない読者にとってはとても分かりやすい仕掛けである。

また、本書では、読者が簡便にアクセスできる資料、具体的にはインターネット上の資料を多数紹介しているが、それらの所在である URL が一切記載されていない点は注目に値する。オンライン上の資料は、URL やアクセス日を併記することが、常識となっているが、本書はあえてそれをしていないのである。これについて著者たちの説明によれば、「URL 情報は頻繁に書き換えられたり、ウェブサイト内の階層構造が再構成される場合も少なく」ない。また、「紙媒体の書籍に『https://www.……』というアルファベットを羅列したところで、それが効果的な方法とは」思わない。これはインターネット上の資料を自身で引用し、また引用した論文を少なからず読んでいる者であれば常々感じていることである。本書の読者には、最低限、それくらいの検索能力くらい修得している、あるいは調べる努力くらいしろよ、という著者のメッセージに他ならない。

本書の構成や仕掛けが、読者として想定される（最近の）大学（1、2年）生の行動様式をよく理解しながら、作られていることに感心する。それとともに、著者たちのしたり顔が脳裏をよぎる。この原稿を書いている2023年12月末、十数本の卒業論文の指導を並行している私は本書にもっと早く出会いたかったと強く思っている。とにかくゼミ生に、ゼミ配属直後にまず本書を読ませ、一次資料へ当たることの意味や、基礎的なノウハウを学修させておけば、もしかしたらもう少し心穏やかに新年を迎えられたのかもしれない。同じような悩みを抱える教員には、ぜひともゼミの課題図書のひとつとして本書を勧めたい。